

Sun Fire X4470 M2 サーバー
設置マニュアル



Part No.: E23454-01
2011 年 6 月

Copyright © 2011 Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション (人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む) への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD, Opteron, AMD ロゴ, AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel, Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. からライセンスされている登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。



リサイクル
してください



Adobe PostScript

目次

このマニュアルの用法	vii
▼ ソフトウェアとファームウェアのダウンロード	viii
1. サーバーの取り付け準備	1
必要な工具および機器	1
サーバー設置作業のチェックリスト	2
梱包を開く	3
サーバーの梱包内容	3
オプション	3
静電気放電に関する注意事項	3
サーバーの説明	4
フロントパネルの機能	4
背面パネルの機能	5
サーバーがサポートする部品	6
Sun Fire X4470 M2 サーバーでサポートされる部品と機能	6
サーバーの仕様	8
物理仕様	8
電気仕様	8
環境要件	9
サーバーの管理	10

- 2. スライドレールによるサーバーのラックへの取り付け 11
 - 取り付けを開始する前に 12
 - サーバー設置プロセスの概要 12
 - ラックの互換性 12
 - スライドレールの分解 14
 - ▼ スライドレールの分解 14
 - サーバーへの取り付けブラケットの取り付け 15
 - ▼ 固定部品の取り付け 15
 - ラックへのスライドレール構成部品の取り付け 17
 - ▼ スライドレール構成部品の取り付け 17
 - スライドレール構成部品へのサーバーの設置 20
 - ▼ スライドレール構成部品へのサーバーの設置 21
 - ケーブル管理アームの取り付け 23
 - ▼ ケーブル管理アームの取り付け 23
 - スライドレールと CMA の動作の確認 27
 - ▼ スライドレールと CMA の動作の確認 27
- 3. ケーブルと電源コードの接続 29
 - 背面パネルのコネクタとポート 29
 - サーバーへのケーブルの接続 30
 - ▼ サーバーのケーブル接続 30
 - サーバへの電源コードの接続 31
 - ▼ 電源コードの接続 31
- 4. Oracle ILOM への接続とサーバーへの主電源の投入 33
 - Oracle ILOM への接続 33
 - ネットワークのデフォルト設定 34
 - ▼ シリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン 34
 - ▼ Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン 35

▼ ネットワーク設定の変更	35
▼ IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト	40
▼ Oracle ILOM の終了	41
サーバーへの主電源の投入	41
▼ サーバーへの主電源の投入	41
▼ 主電源の切断	41
5. オペレーティングシステムのインストールまたは設定	43
オペレーティングシステムのインストール	43
インストール済みのオペレーティングシステムの設定	45
6. インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムの設定	47
設定ワークシート	48
サーバー RAID ドライブの設定	51
インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムの設定	51
▼ Oracle Solaris 10 OS の設定	51
Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムのユーザー情報	53
Oracle Solaris 10 のユーザーマニュアル	53
Oracle Solaris インストールプログラムの使用	54
Oracle Solaris オペレーティングシステムの再インストール	54
Oracle Solaris オペレーティングシステムのダウンロード	54
索引	55

このマニュアルの使用法

このインストールガイドでは、ハードウェアの設置手順とインストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムの設定手順を説明します。これらの手順を実行すると、サーバーを設定および使用できるようになります。

本書は、サーバーシステムを理解しているシステム管理者、ネットワーク管理者、およびサービス技術者を対象としています。

- [vii ページの「製品のダウンロード」](#)
- [viii ページの「ドキュメントとフィードバック」](#)
- [ix ページの「サポートとトレーニング」](#)

製品のダウンロード

すべての Oracle x86 サーバーと サーバーモジュール (ブレード) のダウンロードデータは My Oracle Support (MOS) にあります。MOS には、2 つのタイプのダウンロードデータがあります。

- ラックマウントサーバー、サーバーモジュール、モジュラーシステム (ブレードシャーシ)、または Network Express Module (NEM) に固有のソフトウェアリリースバンドル。これらのソフトウェアリリースバンドルには、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)、Oracle Hardware Installation Assistant、および他のプラットフォームのソフトウェアとファームウェアが含まれます。
- 複数のタイプのハードウェアで共通するスタンドアロンソフトウェア。このソフトウェアには、Hardware Management Pack と Hardware Management Connectors が含まれます。

▼ ソフトウェアとファームウェアのダウンロード

1. (<https://support.oracle.com>) にアクセスします。
2. My Oracle Support にサインインします。
3. ページの上部にある「Patches and Updates (パッチとアップデート)」タブをクリックします。
4. 「Patches Search (パッチ検索)」ボックスで、「Product or Family (Advanced Search) (製品またはファミリー (詳細検索))」を選択します。
5. 「Product? Is (製品は?)」フィールドで、完全な製品名 (たとえば、Sun Fire X4470) を入力するか、または一致する製品名の一覧が表示されるまで、製品名の一部を入力してから、該当する製品を選択します。
6. 「Release? Is (リリースは?)」プルダウンリストで、下矢印をクリックします。
7. 表示された画面で、製品フォルダアイコンの隣にある三角印 (>) をクリックし、選択肢を表示してから、該当するリリースを選択します。
8. 「Patches Search (パッチ検索)」ボックスで、「Search (検索)」をクリックします。製品ダウンロードデータのリスト (パッチとしてリストされる) が表示されます。
9. 該当するパッチ名 (たとえば、Sun Fire X4470 SW 1.1 リリース向けのパッチ 10266805) を選択します。
10. 表示された右側のウィンドウで、「Download (ダウンロード)」をクリックします。

ドキュメントとフィードバック

ドキュメント	リンク
Oracle のすべてのドキュメント	http://www.oracle.com/documentation
Sun Fire X4470 M2 サーバー	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=E20781-01&id=homepage
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=E19860-01&id=homepage

このドキュメントに関するフィードバックは、次の Web サイトから送信できます。

<http://www.oracle.com/surveys/se.ashx?s=25113745587BE578>

サポートとトレーニング

これらの Web サイトでは追加リソースを提供しています。

- サポート (<https://support.oracle.com>)
- トレーニング (<https://education.oracle.com>)

第1章

サーバーの取り付け準備

この章では、Oracle の Sun Fire X4470 M2 サーバーハードウェアを解説し、サーバーをラックに取り付ける前に知っておくべき情報を説明します。この章では、次の項目について説明します。

- 1 ページの「必要な工具および機器」
- 2 ページの「サーバー設置作業のチェックリスト」
- 3 ページの「梱包を開く」
- 4 ページの「サーバーの説明」
- 6 ページの「サーバーがサポートする部品」
- 8 ページの「サーバーの仕様」
- 10 ページの「サーバーの管理」

必要な工具および機器

システムを設置するには、次の工具が必要です。

- プラスのねじ回し (Phillips の 2 番)
- ESD マットおよび接地ストラップ
- 前面パネルのボタンを押すための鉛筆、スタイラス、または他の先が細い工具

また、次のいずれかのシステムコンソールデバイスも必要です。

- Sun ワークステーション
- ASCII 端末
- 端末サーバー
- 端末サーバーに接続されたパッチパネル

サーバー設置作業のチェックリスト

表 1-1 に、サーバーを正しく設置するための作業手順を示します。

表 1-1 設置作業のチェックリスト

手順	作業の説明	手順については、次を参照してください。
1	サーバーおよびサーバー用に注文したオプションのコンポーネントを梱包から取り出します。	• 3 ページの「梱包を開く」
2	該当する場合は、サーバーをラックに設置する前にオプションのサーバー部品を取り付けます。	• Sun Fire X4470 M2 サーバーサービスマニュアル
3	サーバーをラックに設置します。	• 第 2 章
4	サーバーにケーブルと電源コードを接続します。	• 第 3 章
5	Oracle ILOM に接続し、サーバーの主電源を入れます。	• 第 4 章
6	サポートされているオペレーティングシステムと使用可能なインストール済みのオペレーティングシステムに関する情報を取得します。	• 第 5 章
	該当する場合、インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムを設定します。	• 第 6 章
	該当する場合、次のいずれかのオペレーティングシステムをインストールします。	• Linux オペレーティングシステム用 Sun Fire X4470 M2 サーバー設置マニュアル
	• Oracle Linux	
	• Red Hat Enterprise Linux (RHEL)	
	• SUSE Linux Enterprise Server (SLES)	
	• Oracle Solaris 10 オペレーティングシステム	• Oracle Solaris オペレーティングシステム用 Sun Fire X4470 M2 サーバー設置マニュアル
	• Oracle VM	• Sun Fire X4470 M2 サーバー仮想マシンソフトウェアインストールガイド
	• Microsoft Windows Server 2008 SP2 オペレーティングシステム	• Windows オペレーティングシステム用 Sun Fire X4470 M2 サーバー設置マニュアル
	• Microsoft Windows Server 2008 R2 オペレーティングシステム	

梱包を開く

慎重に発送箱を開けます。すべてのサーバーコンポーネントの開梱を行います。

サーバーの梱包内容

Sun Fire X4470 M2 サーバーに同梱されているアイテムは次のとおりです。

- Sun Fire X4470 M2 サーバ
- 電源コード (カントリーキットに別途パッケージ化)
- (オプション) ラックレールと設置指示書を含むラックマウントキット

オプション

電源ケーブルは、ほかのアイテムとは別にパッケージ化されています。

必要なサーバー部品とほとんどのオプションは出荷時に取り付けられています。ただし、一部の注文オプションは別にパッケージ化される場合があります。可能な場合は、サーバーをラックに設置する前にオプションのコンポーネントを取り付けます。サーバーオプションの取り付け手順については、『Sun Fire X4470 M2 サーバーサービスマニュアル』を参照してください。

静電気放電に関する注意事項

電子機器は静電気により損傷する可能性があります。サーバーの設置またはサービス時は、接地された静電気防止リストストラップ、フットストラップ、または同様の安全器具を使用して、静電気による損傷 (ESD) を防止します。



注意 – 電子部品が静電気によって損傷すると、システムが永久に使用できなくなるか、公認の保守技術者による修復が必要になることがあります。電子部品を静電気による損傷から保護するため、静電気防止用マット、静電気防止袋、使い捨て静電気防止用マットなどの静電気防止面に部品を置いてください。システム部品で作業するときは、シャーシの金属面に接続された静電気防止アースストラップを着用します。

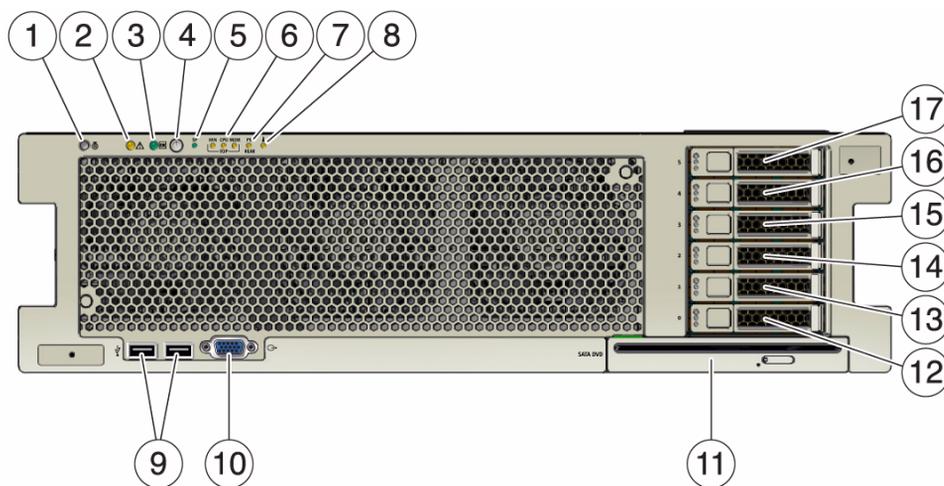
サーバーの説明

この節では、Sun Fire X4470 M2 サーバーの前面と背面を示します。

フロントパネルの機能

図 1-1 では、Sun Fire X4470 M2 サーバーのフロントパネルを示し、その部品を説明します。

図 1-1 Sun Fire X4470 M2 サーバーのフロントパネル



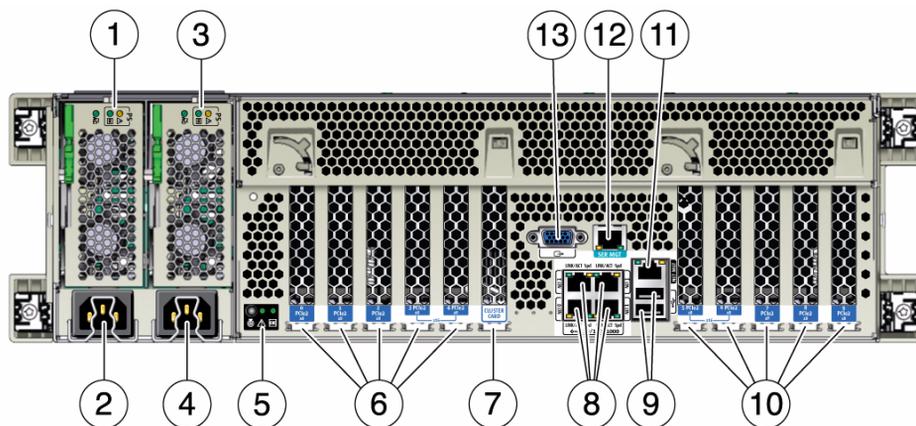
図の説明

- | | | | |
|---|---|----|-----------------------|
| 1 | ロケータ LED/ロケータボタン: 白色 | 10 | DB-15 ビデオコネクタ |
| 2 | 保守要求 LED: オレンジ色 | 11 | SATA DVD ドライブ (オプション) |
| 3 | 主電源/OK LED: 緑色 | 12 | ハードディスクドライブ 0 (オプション) |
| 4 | 電源ボタン | 13 | ハードディスクドライブ 1 (オプション) |
| 5 | SP OK/障害 LED: 緑色/オレンジ | 14 | ハードディスクドライブ 2 (オプション) |
| 6 | ファンモジュール (FAN)、プロセッサ (CPU)、およびメモリの保守要求 LED (3): オレンジ色 | 15 | ハードディスクドライブ 3 (オプション) |
| 7 | 電源装置 (PS) の障害 (保守要求) LED: オレンジ色 | 16 | ハードディスクドライブ 4 (オプション) |
| 8 | 過熱警告 LED (Over Temperature Warning LED): オレンジ色 | 17 | ハードディスクドライブ 5 (オプション) |
| 9 | USB 2.0 コネクタ (2) | | |

背面パネルの機能

図 1-2 では、Sun Fire X4470 M2 サーバーの背面パネルを示し、その部品を説明します。

図 1-2 Sun Fire X4470 M2 サーバの背面パネル



図の説明

- | | |
|--|--|
| 1 電源ユニット 0 の状態インジケータ LED:
保守要求: オレンジ色
DC OK: 緑色
AC OK: 緑色またはオレンジ色 | 8 ネットワーク (NET) の 10/100/1000 ポート:
NET0 ~ NET3 |
| 2 電源ユニット 0 の AC 電源差し込み口 | 9 USB 2.0 コネクタ (2) |
| 3 電源ユニット 1 の状態インジケータ LED:
保守要求: オレンジ色
DC OK: 緑色
AC OK: 緑色またはオレンジ色 | 10 PCIe カードスロット 5 ~ 9 |
| 4 電源ユニット 1 の AC 電源差し込み口 | 11 サービスプロセッサ (Service processor, SP)
ネットワーク管理 (NET MGT) ポート |
| 5 システム状態 LED:
電源/OK: 緑色
注意: オレンジ色
位置特定: 白色 | 12 シリアル管理 (SER MGT)/RJ-45 シリアル
ポート |
| 6 PCIe カードスロット 0 ~ 4 | 13 DB-15 ビデオコネクタ |
| 7 クラスタカードスロット | |

サーバーがサポートする部品

この節では、Sun Fire X4470 M2 サーバーでサポートされている部品について説明します。

Sun Fire X4470 M2 サーバーでサポートされる部品と機能

次の表で、Sun Fire X4470 M2 サーバーの部品と機能を説明します。

表 1-2 Sun Fire X4470 M2 サーバーの部品と機能

コンポーネント	X4470 M2 サーバー
CPU	<p>サポートされている構成:</p> <ul style="list-style-type: none">• ソケット 0 とソケット 2 に取り付けられた 2 つのプロセッサ• ソケット 0 ~ 3 に取り付けられた 4 つのプロセッサ <p>CPU 仕様に関する最新情報については、Sun Fire x86 ラックマウントサーバーの Web サイトにアクセスし、Sun Fire X4470 M2 サーバーのページを参照してください。(http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html)</p>
メモリー	<p>サーバーシャーシには、最大 8 つのメモリーライザーモジュール (各 CPU に対して 2 つのライザー) を搭載できます。各ライザーモジュールには 8 つの PC3L RDIMM を搭載できるため、各プロセッサに最大 16 個の RDIMM を搭載できます。</p> <ul style="list-style-type: none">• 16G バイトの RDIMM が搭載されたライザーモジュールを 4 つ使用している 2 ソケットシステムでは、システムメモリーを最大で 512G バイトにすることができます。• 16G バイトの RDIMM が搭載されたライザーモジュールを 8 つ使用している 4 ソケットシステムでは、システムメモリーを最大で 1024G バイトにすることができます。
ストレージデバイス	<p>内部ストレージの場合、サーバーシャーシに次のハードウェアを搭載できます。</p> <ul style="list-style-type: none">• フロントパネルから接続できる 2.5 インチドライブベイ (6 個)。各ドライブベイに対してサポートされるドライブインタフェースは、選択されているホストバスアダプタ (Host Bus Adapter, HBA) によって異なります。• サーバーの前面のドライブベイの下に設置される、オプションのスロット搭載の DVD+/-RW ドライブ。この SATA DVD は USB-SATA ブリッジに接続されるため、システムソフトウェアでは USB ストレージデバイスと見なされます。• マザーボード上に内蔵されている高速 USB ポート (1 個)。このポートでは、システム起動用の USB フラッシュデバイスを保持できます。
USB 2.0 ポート	前面に 2 つ、背面に 2 つ、内部に 1 つあります。

表 1-2 Sun Fire X4470 M2 サーバーの部品と機能 (続き)

コンポーネント	X4470 M2 サーバー
VGA ポート	前面に 1 つあり、背面には DB-15 高密度ビデオポートが 1 つあります。 注 - 背面の VGA ポートは、モニター認識用の VESA デバイスデータチャンネルをサポートしています。
PCI Express 2.0 I/O スロット	ロープロファイルの PCIe カードを格納するための PCI Express 2.0 スロット (10 個)。すべてのスロットで、x8 PCIe コネクタを使用できます。2 つのスロットでは、x16 PCIe コネクタも使用できます。 <ul style="list-style-type: none"> スロット 0 および 9: x4 電気インタフェース スロット 1、2、4、6、7、および 8: x8 電気インタフェース スロット 3 および 5: x8 または x16 電気インタフェース (x16 コネクタ) 注 - PCI Express スロット 3 および 5 は、x16 対応のカードが搭載され、隣のスロット (4 または 6) にカードが搭載されていない場合のみ、x16 インタフェースとして動作します。
クラスタカードスロット	Sun Storage アプライアンスで使用するための専用の特殊スロット (1 つ)。Sun Fire X4470 M2 では、このスロットに標準の PCIe カードを搭載できません。
PCI Express I/O カード	お客様が注文できる I/O カードの一覧については、Sun Fire x86 ラックマウントサーバーの Web サイトにアクセスし、Sun Fire X4470 M2 サーバーのページを参照してください。 (http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html)
Ethernet ポート	背面パネルの 10/100/1000 RJ-45 GbE ポート (4 つ)。 各ネットワークインタフェースコントローラ (Network Interface Controller, NIC) は、Intel QuickData Technology、Intel I/OAT、VMDq、PCI-SIG SR-IOV、IPSec オフロード、および LinkSec をサポートしています。
サービスプロセッサ	業界標準の IPMI 機能セットをサポートする統合 Baseboard Management Controller (BMC)。 IP を介して、リモート KVMs、DVD、およびフロッピーをサポート (オプションのライセンスが必要) シリアルポートを含む 専用の 10/100BaseT 管理ポートおよびオプションでホストの GbE ポート (サイドバンド管理) のいずれかを使用して、SP への Ethernet アクセスをサポートしています。
電源装置	ホットスワップが可能な電源装置 (2 つ)。どちらも、2000 ワット容量 (200 ~ 240 ボルト)、自動範囲設定 (auto-ranging)、軽負荷効率モード (light load efficiency mode)、冗長オーバーサブスクリプション (redundant over-subscription) を備えています。
冷却ファン	シャーシの前面 (最上部) のホットスワップが可能な冗長ファン (6 つ)。冗長ファンは、各電源装置に搭載されています。
管理ソフトウェア	Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)。

サーバーの仕様

物理仕様

表 1-3 に、Sun Fire X4470 M2 サーバーの物理仕様を一覧表示します。

表 1-3 サーバーの物理仕様

パラメータ	Sun Fire X4470 M2 サーバー
高さ	5.11 インチ (129.85 mm)
幅	17.19 インチ (436.5 mm)
奥行	28.82 インチ (732 mm)
重量	最大 83 ポンド、最小 58 ポンド (最大 37.65 kg、最小 26.31 kg)

電気仕様

表 1-4 に、Sun Fire X4470 M2 サーバーの電気仕様を一覧表示します。

注 – 電力消費に関する最新情報については、Sun Fire x86 ラックマウントサーバーの Web サイトにアクセスし、Sun Fire X4470 M2 サーバーのページを参照してください。
(<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html>)。

表 1-4 サーバーの電気仕様

パラメータ	値
入力	
周波数	50/60 Hz
AC 動作電圧範囲	100-127 VAC (2 つの CPU の場合) 200-240 VAC (2 または 4 つの CPU の場合)
最大電流 AC RMS	12A @ 100 VAC、12A @ 200 VAC

表 1-4 サーバーの電気仕様 (続き)

パラメータ	値
電力消費	
最大電力消費	1800 W
最大出熱	6143 BTU/時
定格電圧・電流	1837 VA @ 240 VAC、0.98 P.F.

環境要件

表 1-5 に、Sun Fire X4470 M2 サーバーの環境要件を一覧表示します。

表 1-5 サーバーの環境要件

パラメータ	値
動作温度 (単一のラック以外のシステム)	5°C - 35°C (41°F - 95°F)
非動作時温度 (単一のラック以外のシステム)	-40°C - 70°C (-40°F - 158°F)
動作湿度 (単一のラック以外のシステム)	10 ~ 90% の相対湿度、結露なし
非動作時湿度 (単一のラック以外のシステム)	最大 93% の相対湿度、結露なし
動作高度 (単一のラック以外のシステム)	最大 3048 m、最大周囲温度は 900 m を超えると 300 m ごとに摂氏 1 度ずつ下がる
非動作時高度 (単一のラック以外のシステム)	最大 12,000 m

サーバーの管理

設置したサーバーの管理については、状況に応じていくつかの異なるオプションがあります。

■ 多数のサーバーの管理

さまざまなシステム管理ツールを使用してサーバーを管理することができます。システム管理ツールの詳細は、次の Web サイトにある情報を参照してください。
(<http://www.oracle.com/goto/system-management>)

これらのツールの例には次のものがあります。

- 使用しているサーバーが多数の x86 および SPARC サーバーのうちの 1 つであり、単一のインタフェースから管理する場合は、Oracle Enterprise Manager Ops Center を使用できます。詳細は、次の Web サイトを参照してください。
(<http://www.oracle.com/us/products/enterprise-manager/opscenter/index.html>)
- エンタープライズサーバーを監視する場合は、Sun Management Center を利用できます。詳細は、次の Web サイトを参照してください。
(<http://www.oracle.com/technetwork/systems/patches/sysmgmt/smc-jsp-138444.html>)
- すでにサードパーティのシステム管理ツールがある場合は、サーバーを多数のサードパーティツールに組み込むことができます。詳細は、次の Web サイトを参照してください。
(<http://www.oracle.com/goto/system-management>)
- 単一のサーバーの管理
 - Oracle Hardware Installation Assistant は、サーバーの初期構成に使用できるアプリケーションです。このアプリケーションを使用すると、ファームウェア (Oracle ILOM ファームウェア、BIOS、および RAID コントローラソフトウェア) を更新したり、Linux または Windows オペレーティングシステムのインストールを自動化したりすることができます。詳細は、『Oracle Hardware Installation Assistant 2.5 ユーザーズガイド x86 サーバー版』を参照してください。
(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=E19593-01&id=homepage>)

注 – Oracle Hardware Installation Assistant の以前の名称は *Sun Installation Assistant (SIA)* です。

- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) は、サーバーの状態と構成の監視に使用できる組み込みソフトウェアおよびハードウェアです。詳細は、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 ドキュメントライブラリを参照してください。
(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=E19860-01&id=homepage>)

第2章

スライドレールによるサーバーのラックへの取り付け

この章では、ラックマウントキットのレール構成部品を使用して、サーバーをラック内に取り付ける方法について説明します。レール構成部品を購入した場合は、この手順を実行します。

この章では、次の項目について説明します。

- 12 ページの「取り付けを開始する前に」
- 12 ページの「ラックの互換性」
- 14 ページの「スライドレールの分解」
- 15 ページの「サーバーへの取り付けブラケットの取り付け」
- 17 ページの「ラックへのスライドレール構成部品の取り付け」
- 20 ページの「スライドレール構成部品へのサーバーの設置」
- 23 ページの「ケーブル管理アームの取り付け」
- 27 ページの「スライドレールと CMA の動作の確認」

注 – 本書では、用語「ラック」とはオープンラックまたはクローズキャビネットを意味します。

取り付けを開始する前に

ラック内へのサーバーの取り付けを始める前に、次の概要を読み、上部カバーのサービスラベルを確認してください。

サーバー設置プロセスの概要

オプションのスライドレールとケーブル管理アームを使用してサーバーを 4 ポストラック内に設置するには、次に示す順序で作業を実行します。

1. [12 ページの「ラックの互換性」](#)
2. [14 ページの「スライドレールの分解」](#)
3. [15 ページの「サーバーへの取り付けブラケットの取り付け」](#)
4. [23 ページの「ケーブル管理アームの取り付け」](#)
5. [27 ページの「スライドレールと CMA の動作の確認」](#)
6. [29 ページの「背面パネルのコネクタとポート」](#)

ラックの互換性

使用するラックがオプションのスライドレールおよびケーブル管理アーム (CMA) と互換性があることを確認します。オプションのスライドレールは、次の仕様を満たすさまざまな標準ラックに対応しています。

表 2-1 ラックの互換性

アイテム	要件
構造	前後左右で固定する形式の 4 ポストラック。2 ポストのラックにはマウントできません。
ラックの横方向の開口部とユニットの縦方向のピッチ	ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 規格に適合すること。M6 ネジ穴 (9.5 平方ミリメートル) だけがサポートされています。
前側取り付け面と後ろ側取り付け面の距離	610 - 915 mm (24 - 36 インチ)。

表 2-1 ラックの互換性 (続き)

アイテム	要件
前側取り付け面の前面の隙間	キャビネット前面ドアまでの距離が 25.4 mm (1 インチ) 以上あること。
前側取り付け面の背後の隙間	ケーブル管理アームを使用する場合は、キャビネット後面ドアまで 900 mm (35.5 インチ) 以上の間隔があること。ケーブル管理アームを使用しない場合は 770 mm (30.4 インチ) 以上であること。
前側取り付け面と後ろ側取り付け面の幅	構造的支柱とケーブルの溝の距離が 456 mm (18 インチ) 以上であること。
サーバーの寸法	奥行き: (PSU ハンドルを含まない長さ): 732 mm (28.82 インチ) 幅: (耳を含まない長さ): 436.5 mm (17.19 インチ) 高さ: 129.85 mm (5.11 インチ)



注意 – 装置の搭載: 上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。転倒防止機構を装備しているラックであれば、サーバー取り付け時に活用してください。



注意 – 動作時周辺温度の上昇: 密閉されたラックアセンブリまたはマルチユニットのラックアセンブリにサーバーを設置している場合、ラック環境の動作時周辺温度が室内の周辺温度より高くなる場合があります。したがって、サーバーに対して指定されている最大周辺温度 (T_{ma}) に適した環境に装置を設置することを検討するようにしてください。サーバーの環境要件については、9 ページの「環境要件」を参照してください。



注意 – 通気の減少: 装置の安全な動作に必要な通気が妨げられないように、装置をラック内に設置するようにしてください。



注意 – 装置の配置: 不均等な装置の配置によって危険な状態が発生しないよう、装置をラック内に取り付けるようにしてください。



注意 – 回路の過負荷: 電源回路への装置の接続、および回路の過負荷によって発生する可能性のある過電流対策や電源配線についても考慮するようにしてください。これについて対処するときは、装置のネームプレートに表示された定格電力に従った配電が必要です。



注意 – 確実なアース: ラックマウント型装置の確実なアースが保たれるようにしてください。分岐回路への直接接続以外の電源接続 (テーブルタップの使用など) の場合は、特に注意を払うようにしてください。



注意 – スライドレールに搭載した機器を棚または作業スペースとして使用しないでください。

スライドレールの分解

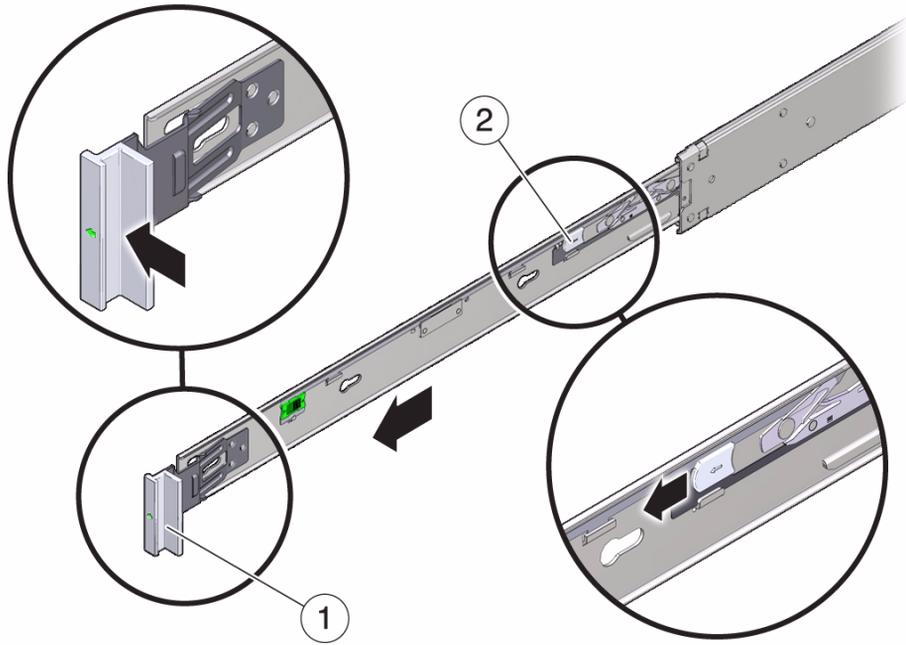
取り付け前にスライドレールを分解するには、次の手順を実行します。

▼ スライドレールの分解

スライドレール構成部品から固定部品を取り外すには、次の手順に従います。

1. スライドレールを開梱します。
2. スライドレール構成部品の前面にあるスライドレールロックを特定します (図 2-1)。
3. 矢印の方向にスライドレールロックを押しながら、固定部品がストップに達するまでスライドレールから引き出します (図 2-1)。
4. 取り付けブラケットリリースボタンを取り付けブラケットの前側に押しながら (図 2-1)、取り付けブラケットをスライドレール構成部品から外します。
5. すべてのスライドレール構成部品で上記の手順を繰り返します。

図 2-1 取り付け前のスライドレールの分解



図の説明

-
- 1 スライドレールロック
 - 2 固定部品リリースボタン
-

サーバーへの取り付けブラケットの取り付け

サーバーをラックに搭載する前に、固定部品をサーバーに取り付けます。

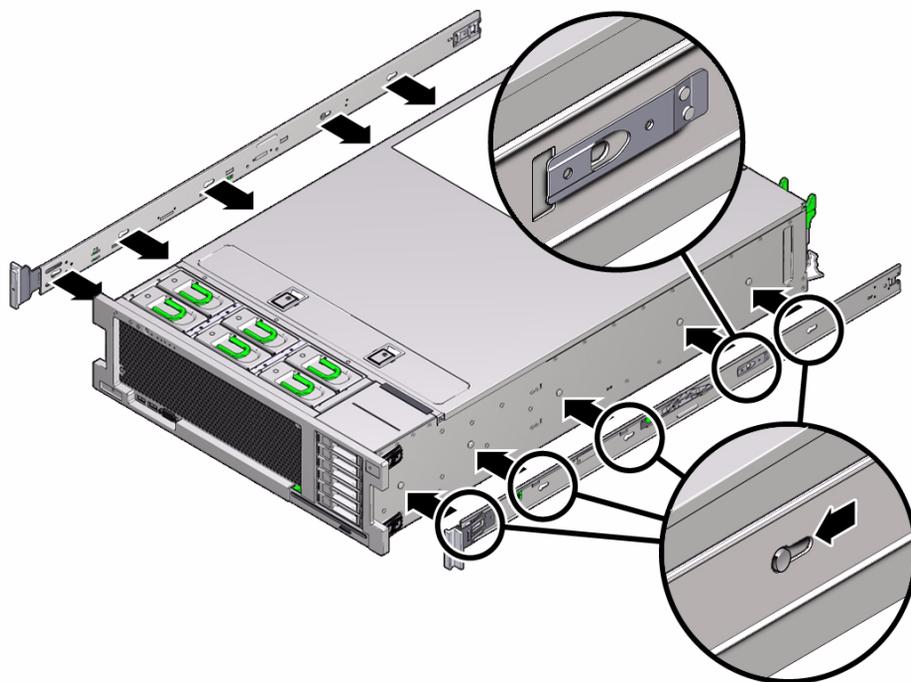
▼ 固定部品の取り付け

固定部品をサーバーの側面に取り付けるには、次の手順に従います。

1. スライドレールロックがサーバーの前面に来て、固定部品の 5 つの鍵穴の開口部がシャーシの側面にある 5 つの位置決め用ピンと整列するように、シャーシに対して固定部品を位置決めします (図 2-2)。

注 - 固定部品はすべて同一で、シャーシのどちら側にも取り付けることができます。

図 2-2 取り付けブラケットとサーバーシャーシとの整列



2. 5 つのシャーシ位置決め用ピンの頭を固定部品の 5 つの鍵穴の開口部に挿入し、固定部品を、クリップが「カチッ」と音がして固定されるまで、シャーシの前面に向けて引っ張ります (図 2-2)。
3. 背面のロケートピンが取り付けブラケットのクリップにかみ合っていることを確認します
4. 上記の手順を繰り返してサーバーのもう片方のブラケットを取り付けます。

ラックへのスライドレール構成部品の取り付け

次の手順を実行して、スライドレール構成部品をラックに取り付けます。

注 – スライドレール構成部品では、9.5 mm の四角穴および M6 丸穴のみ使用できます。7.2 mm、M5、10 ~ 32 の取り付け穴など、その他のすべてのラックは使用できません。レール穴のサイズの詳細については、ラックのドキュメントを参照してください。

▼ スライドレール構成部品の取り付け

スライドレール構成部品をラックに取り付けるには、次の手順に従います。

1. (省略可能) サーバーが設置されているラックを移動する必要がある場合は、取り付けネジとケージナットを使用してスライドレール構成部品を取り付けることをお勧めします。

手順 2 を実行する前に、ケージナットを差し込んでおきます。ケージナットの実行手順については、レールラックマウントキットの概要と情報カードを参照してください。このカードはレールキットに含まれています。

2. スライドレール構成部品の前面の固定部品が前面のラックのポストの外側に来るように、また、スライドレール構成部品の背面の固定部品が背面のラックのポストの内側に来るように、ラック内でスライドレール構成部品を位置決めします (図 2-5)。
3. スライドレール構成部品の取り付けピン (mounting pin) と、前面と背面のラックのポストの取り付け穴の位置合わせを行います。次に、取り付けピン (mounting pin) がラックにかみ合うまで構成部品をラックの背面の方向に押し込んで、構成部品を固定します (図 2-3 および図 2-4)。

取り付けピンとラックがかみ合うと、カチっという音がします。

注 – スライド構成部品の取り付けピンは、9.5 mm 四角穴と M6 丸型取り付け穴でのみ使用できます。それ以外のサイズの取り付け穴では使用できません。

図 2-3 ラックへのスライドレール構成部品の取り付け

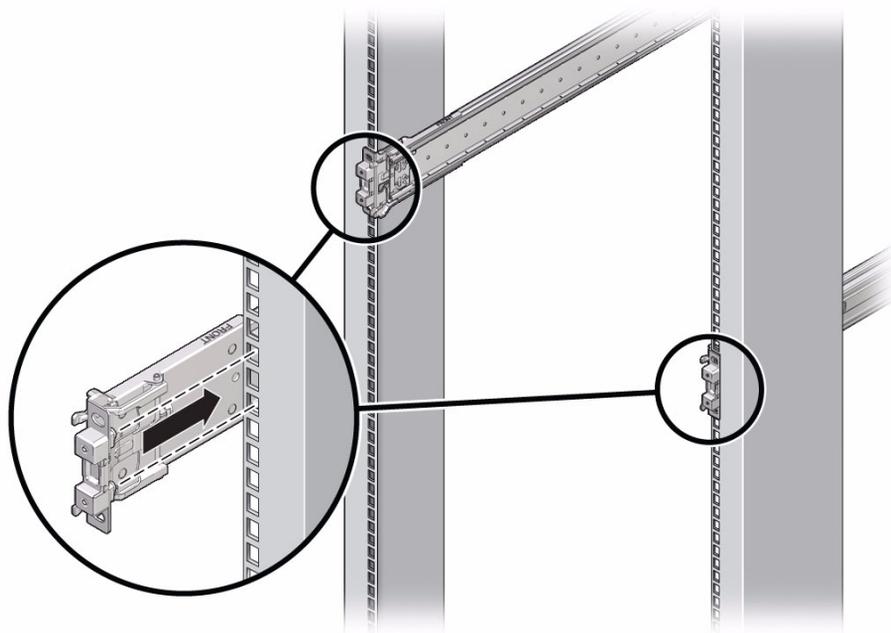
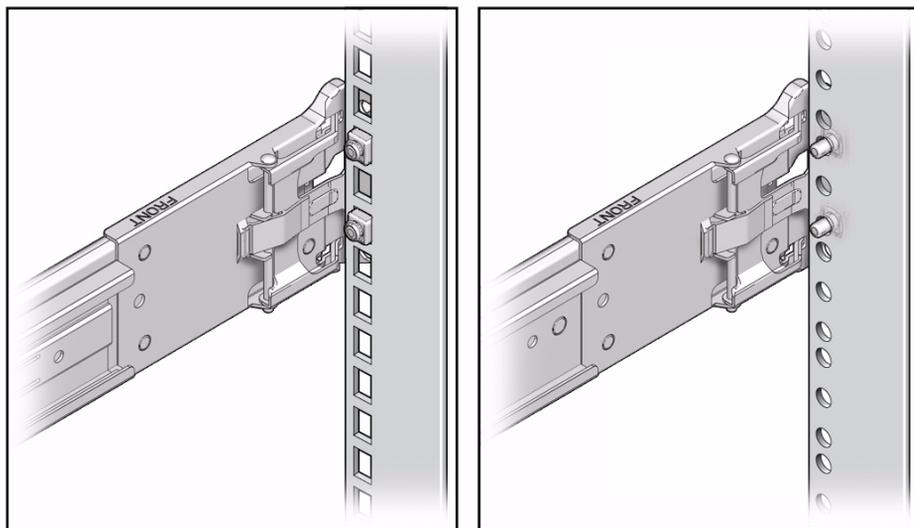
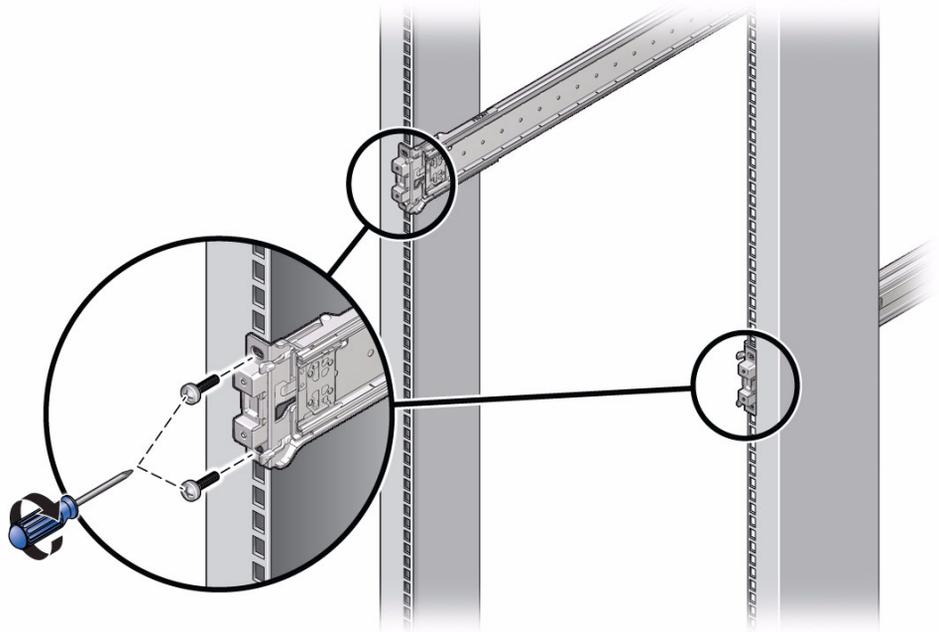


図 2-4 スライドレール取り付けピン



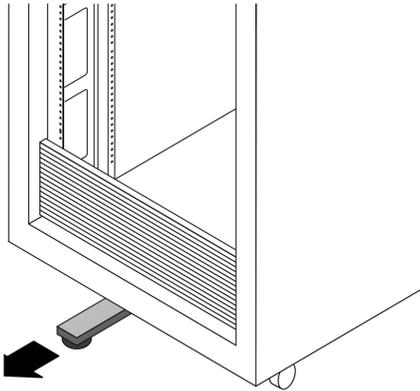
4. (省略可能) 取り付けネジとケージナットを使用してスライドレール構成部品を取り付けるように選択した場合、前面と背面の両方のスライドレール固定部品とラックのポストの穴に M6 取り付けネジを通し、ケージナットで締め付けます。(図 2-5)。

図 2-5 ラックへのスライドレール構成部品の取り付け



5. 手順 2 から手順 4 を繰り返して、残りのスライドレール構成部品を取り付けます。
6. 利用可能な場合は、ラックの下部の転倒防止バーを伸ばします (図 2-6)。手順については、ラックのドキュメントを参照してください。

図 2-6 転倒防止用バーの引き出し



注意 – ラックに転倒防止用のバーがない場合、ラックが転倒する可能性があります。

スライドレール構成部品へのサーバーの設置

固定部品を取り付けたサーバーシャーシを、ラックに取り付けられているスライドレール構成部品に設置するには、ここで説明する手順に従います。



注意 – サーバーは重いので、この手順では少なくとも 2 名の作業者が必要です。この手順を 1 人で実行すると、機器が損傷したり、けがをする可能性があります。



注意 – 上方が重くなり転倒することがないように、機器は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。転倒防止用のバーを伸ばして、機器の設置中にラックが転倒しないようにしてください。

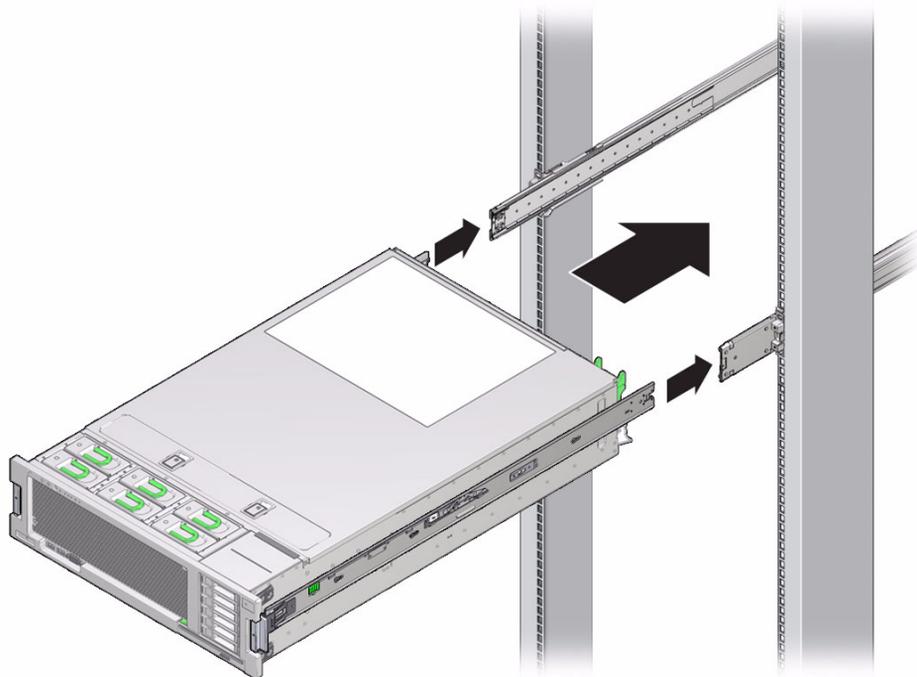
▼ スライドレール構成部品へのサーバーの設置

1. スライドレールをラックのスライドレール構成部品に可能な限り奥まで押し込みます。
2. 固定部品の後端が、ラックに取り付けられているスライドレール構成部品と整列するようにサーバーを持ち上げます (図 2-7)。
3. 取り付けブラケットをスライドレールに挿入し、取り付けブラケットがスライドレールのストップに接触するまでサーバーをラック内に押し込みます (約 30 cm (12 インチ))。



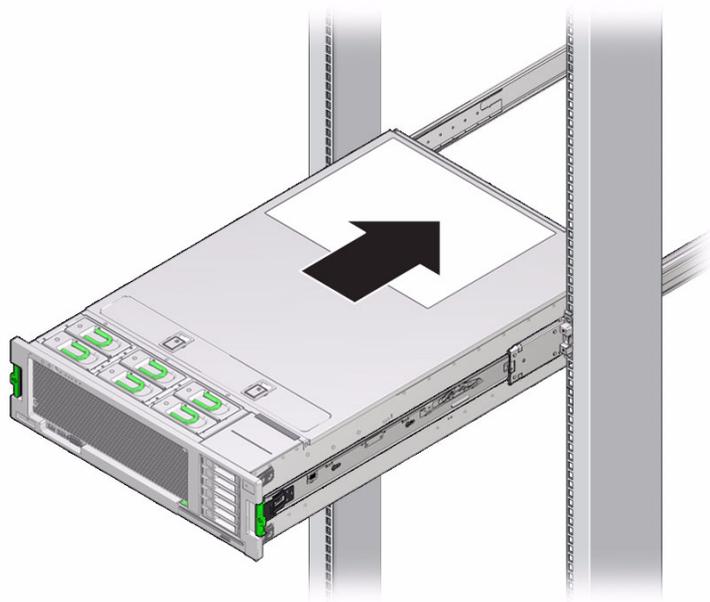
注意 – サーバーをスライドレールに挿入するとき、固定部品の上下の取り付けリップ (mounting lip) がスライドレールに挿入されていることを確認します。サーバーが正しく取り付けられている場合は、サーバーを前後に簡単にスライドできます。サーバーを簡単にスライドできない場合は、各取り付けリップ (mounting lip) が正しく挿入されていることを確認してください。固定部品が正しく挿入されていないと、サーバーをラックから取り外すときに落としてしまう可能性があります。

図 2-7 固定部品を取り付けたサーバーのスライドレールへの挿入



4. 両方の固定部品の緑色のスライドレールリリースボタン (図 2-1) を同時に押しなが
ら、サーバーをラック内に押し込みます (図 2-8)。固定部品の前面のスライド
レールロックがスライドレール構成部品にかみ合うまで押し込みます。
かみ合うと、「カチッ」と音がします。

図 2-8 ラックへのサーバーのスライド



注意 – サーバーがラックにしっかりと取り付けられていること、およびスライドレールロックが固定部品にかみ合っていることを確認してから次の手順に進みます。

ケーブル管理アームの取り付け

ケーブル管理アーム (Cable Management Arm、CMA) はオプションの構成部品であり、ラック内のサーバーケーブルの配線に使用できます。

▼ ケーブル管理アームの取り付け

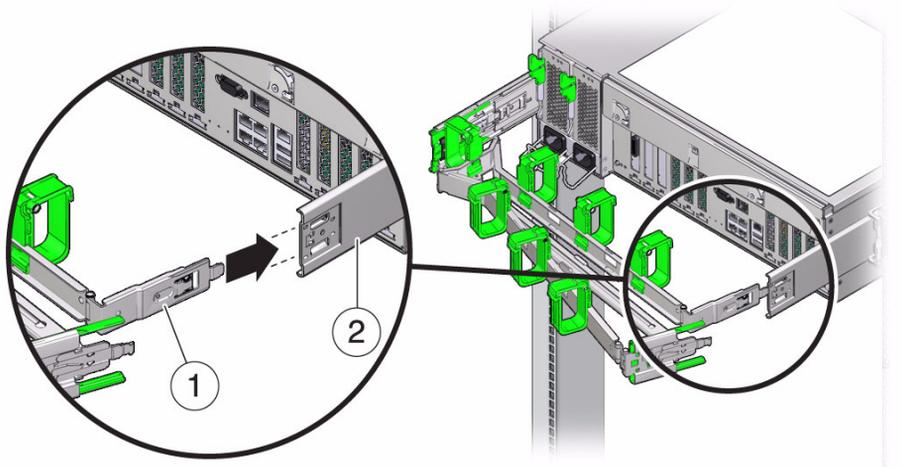
オプションの CMA を取り付けるには、ここで説明している手順に従います。

1. CMA の部品を開梱します。
2. CMA を機器ラックの背面に移動し、サーバーの背後に十分な作業スペースがあることを確認します。

注 - この手順の「左」と「右」は、機器ラックの背面を見たときの左と右を示します。

3. テープを剥がして CMA の部品を分けます。
4. CMA の固定部品コネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、右側のスライドレールに差し込みます (図 2-9)。

図 2-9 右側スライドレール後部への CMA 取り付けブラケットの挿入

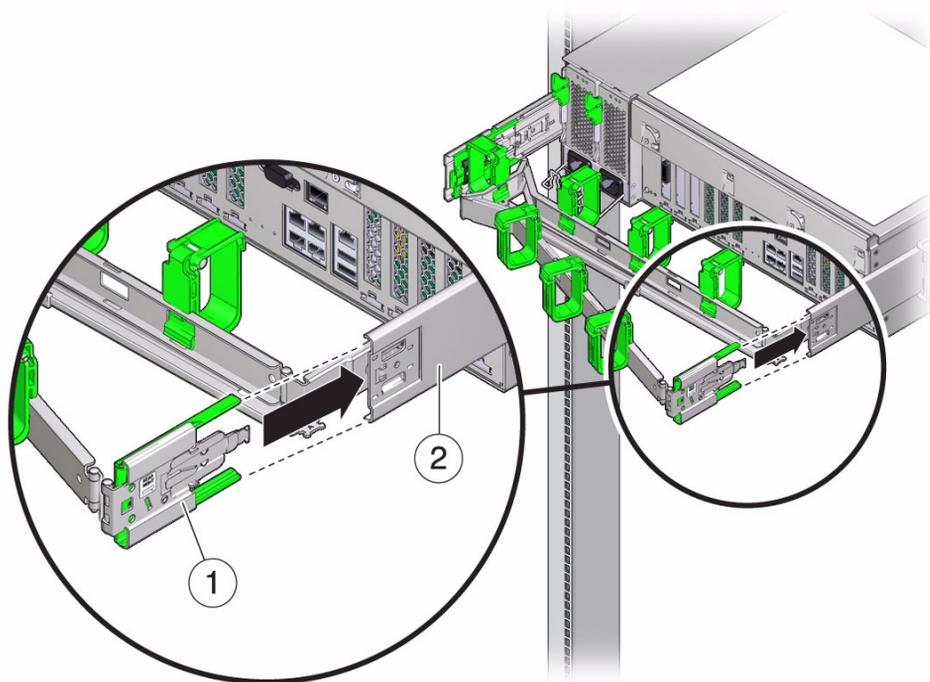


図の説明

- 1 CMA 固定部品
- 2 右側スライドレール

5. 右側の CMA スライドレールコネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、右側スライドレール構成部品に差し込みます (図 2-10)。

図 2-10 右側スライドレール後部への CMA スライドレールコネクタの挿入

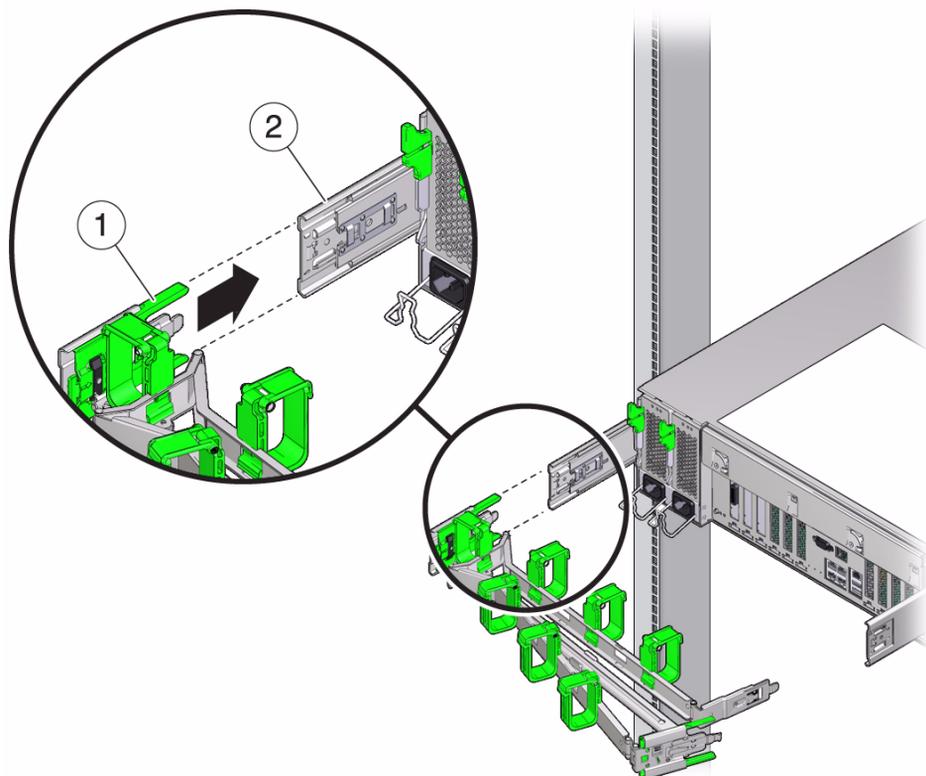


図の説明

-
- 1 CMA スライドレールコネクタ
 - 2 右側スライドレール
-

6. 左側の CMA スライドレールコネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、左側のスライドレール構成部品に差し込みます (図 2-11)。

図 2-11 左側スライドレール後部への CMA スライドレールコネクタの挿入



図の説明

-
- 1 CMA スライドレールコネクタ
 - 2 左側スライドレール
-

7. 必要に応じて、サーバーまで経路を設定してケーブルを取り付けます。

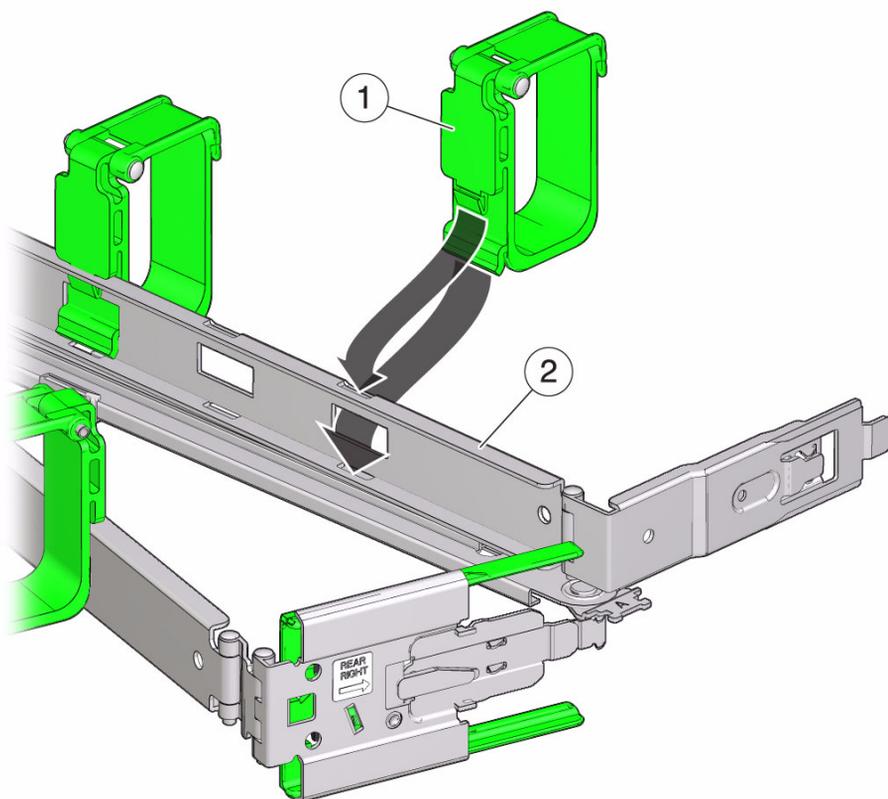
注 - サーバークーブルの取り付け方法については、29 ページの「背面パネルのコネクタとポート」を参照してください。

8. 必要に応じて、ケーブルフックとループストラップを CMA に取り付け、所定の位置に押し込んでケーブルを固定します (図 2-12)。

注 – ケーブルフックとループストラップは、CMA にあらかじめ取り付けられています。ケーブルフックとループストラップを CMA に取り付け直す必要がある場合は、この手順を実行してください。

最善の結果を得るには、3つのケーブルストラップを CMA の背面側に等間隔に配置し、3つのケーブルストラップをサーバーにもっとも近い CMA の側面に配置します。

図 2-12 CMA ケーブルストラップの設置



図の説明

-
- 1 CMA ケーブルストラップ
2 CMA アーム
-

スライドレールと CMA の動作の確認

スライドレールと CMA が正しく動作していることを確認するには、次の手順に従います。

▼ スライドレールと CMA の動作の確認

注 – この手順は、2 人の作業員で実行することをお勧めします。1 人がサーバーをラックの前後に動かし、もう 1 人がケーブルと CMA を監視します。

1. スライドレールがストップに達するまで、ラックからサーバーをゆっくりと引き出します。
2. バインドまたはねじれがないか、接続されたケーブルを検査します。
3. CMA がスライドレールからいっぱいまで伸びることを確認します。
4. 次の手順に従って、サーバーをラック内に押し込みます。

サーバーを完全に引き出したときに、2 対のスライドレールストップを解放してサーバーをラックに戻します。

- a. 最初の対のストップは各スライドレールの内側 (サーバーの背面パネルのすぐ後ろ) にあるレバーです。両方の緑色のレバーを同時に押し、サーバーをラックに向かってスライドさせます。

サーバーは約 46 cm (18 インチ) スライドして停止します。

ケーブルと CMA が引っかからずに格納されることを確認します。

- b. 2 番目の対のストップは、各固定部品の前面近くにあるスライドレールリリースボタンです (図 2-1)。両方の緑色のスライドレールリリースボタンを同時に押し、両方のスライドレールロックがかみ合うまでサーバーを完全にラック内に押し込みます。

5. 必要に応じて、ケーブルストラップと CMA を調整します。

第3章

ケーブルと電源コードの接続

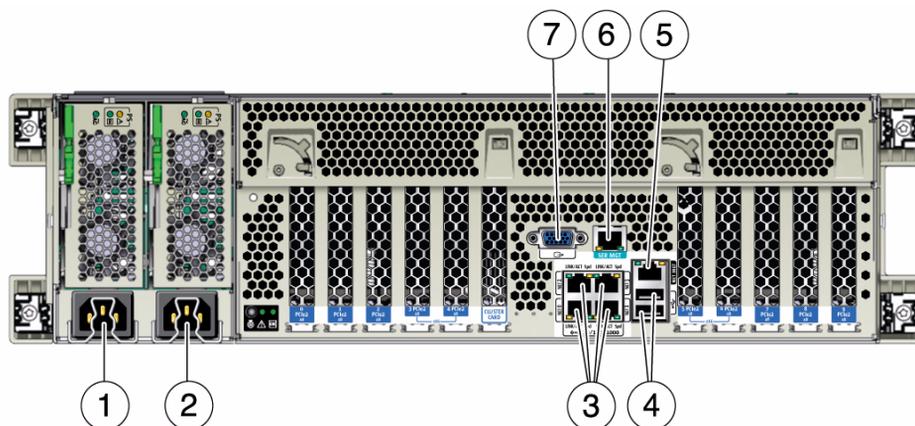
この章では、サーバーにケーブルを接続し、初めて電源を投入する方法について説明します。この章では、次の項目について説明します。

- 29 ページの「背面パネルのコネクタとポート」
- 30 ページの「サーバーへのケーブルの接続」
- 31 ページの「サーバへの電源コードの接続」

背面パネルのコネクタとポート

図 3-1 に、サーバーの背面パネルのコネクタおよびポートの位置と説明を示します。

図 3-1 背面パネルのコネクタとポート



図の説明

1 電源ユニット 0 の AC 電源差し込み口	5 サービスプロセッサ (Service Processor、SP) ネットワーク管理 (NET MGT) Ethernet ポート
2 電源ユニット 1 の AC 電源差し込み口	6 シリアル管理 (SER MGT)/RJ-45 シリアルポート
3 ネットワーク (NET) の 10/100/1000 ポート: NET0 ~ NET3	7 DB-15 ビデオコネクタ
4 USB 2.0 コネクタ (2)	

サーバーへのケーブルの接続

次の手順に従って、ケーブルをサーバーに接続します。

▼ サーバーのケーブル接続

外部ケーブルを次の順序でサーバーに接続します。図 3-1 を参照してください。

1. 必要に応じて、Ethernet ケーブルを OS サポート用のギガビット Ethernet (NET) コネクタに接続します [3]。
2. (省略可能) システムコンソールで直接対話する場合は、マウスやキーボードなどの外部デバイスをサーバーの USB コネクタ [4] に、モニターを DB-15 ビデオコネクタ [7] に接続します。
3. ネットワークで Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) ソフトウェアに接続する場合は、Ethernet ケーブルを NET MGT とラベル付けされた Ethernet ポート [5] に接続します。

注 – サービスプロセッサ (SP) は、デフォルトで NET MGT (帯域外) ポートを使用します。代わりに、SP がサーバーの 4 つの 10/100/1000 Ethernet ポートのいずれかを使用するように設定できます。SP は設定済みの Ethernet ポートのみを使用します。

4. シリアル管理ポートを使用して Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (Command Line Interface、CLI) にアクセスする場合は、シリアルヌルモデムケーブルを SER MGT とラベル付けされた RJ-45 シリアルポート [6] に接続します。
シリアルコンソールからのシステム出力の確認方法については、34 ページの「シリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」を参照してください。

サーバへの電源コードの接続

次の手順に従って、電源コードをサーバーに接続します。電源コードが接続されると、サーバーはスタンバイ電源モードに入ります。

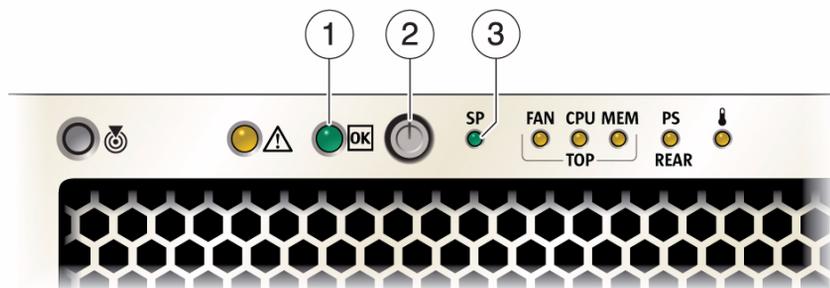
注 - デフォルトでは、低電圧線 (100 ~ 127 ボルト) の AC 電源で動作するのは 2 CPU システムのみです。4 CPU システムの主電源をオンにするには、システムに高電圧線 (200 ~ 240 ボルト) の AC 電源が必要です。

▼ 電源コードの接続

1. アースされた 2 本のサーバー電源コードをアースされたコンセントに接続します。
2. 2 本のサーバー電源コードをサーバーの背面パネルの AC コネクタに接続します (図 3-1 [1、2])。

電源が接続されると、サーバーはスタンバイ電源モードに入ります。Oracle ILOM が起動するときに SP OK/障害 LED が点滅し、Oracle ILOM のシステムログインの準備ができるまで、主電源/OK LED は点灯しません (図 3-2)。数分後、主電源/OK LED がスタンバイパターンでゆっくりと点滅し、サービスプロセッサ (SP) が使用できる状態になったことを示します。サーバーはまだ初期化されていませんし、電源も入っていません。

図 3-2 フロントパネルのインジケータと電源ボタン



図の説明

- 1 主電源/OK LED
- 2 電源ボタン
- 3 SP OK/障害 LED

第4章

Oracle ILOM への接続とサーバーへの主電源の投入

この章では、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) のコマンド行インタフェース (Command-Line Interface、CLI) にアクセスし、サーバーを管理する方法について説明します。サーバーの主電源を入れる方法についても説明します。

この章は、次の節で構成されています。

- [33 ページの「Oracle ILOM への接続」](#)
- [41 ページの「サーバーへの主電源の投入」](#)

注 – この章では、Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (Command-Line Interface、CLI) に接続する方法について説明します。Oracle ILOM は Web インタフェース (BUI) としても使用できます。Web インタフェースを使用する手順と Oracle ILOM を使用する完全な手順については、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 ドキュメントライブラリを参照してください。

Oracle ILOM への接続

この節では、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使用して、サーバーの IP アドレスを設定する方法について説明します。次のトピックが含まれています。

- [34 ページの「ネットワークのデフォルト設定」](#)
- [34 ページの「シリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)
- [35 ページの「Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)
- [35 ページの「ネットワーク設定の変更」](#)
- [40 ページの「IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」](#)
- [41 ページの「Oracle ILOM の終了」](#)

ネットワークのデフォルト設定

Sun Fire X4470 M2 は、Oracle ILOM が IPv4 および IPv6 ネットワーク環境で完全に動作することを可能にするデュアルスタック IPv4 および IPv6 設定をサポートしています。IPv4 構成の場合、DHCP がデフォルトで有効になっているので、ネットワーク上の DHCP サーバーがネットワーク設定をサーバーに自動的に割り当てます。IPv6 構成の場合、IPv6 Stateless 自動設定がデフォルトで有効になっているので、ネットワーク上の IPv6 ルーターがネットワーク設定を割り当てます。通常の構成では、DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターが割り当てるこれらの設定を受け入れます。

注 - DHCP サーバーが割り当てる IP アドレスまたはホスト名を決定するには、DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターに付属しているネットワークツールを使用してください。

この節の手順に従って、割り当てられた設定が正しく動作していることをテストし、Oracle ILOM への接続をローカルおよびリモートで確立することができます。ローカルでログインするには、[34 ページの「シリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)を参照してください。リモートでログインするには、サーバー SP に割り当てられた IP アドレス、ホスト名、または IPv6 ローカルリンク名を使用し、[35 ページの「Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)の手順に従います。

▼ シリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン

この手順では、サーバー SP の IP アドレスを知っている必要はありません。ただし、Oracle ILOM 管理者アカウントを持っている必要があります。

注 - サーバーの出荷時に設定されているデフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントは root、パスワードは changeme です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

1. サーバーへのシリアルコンソール接続のセキュリティが確保され、接続が正しく動作していることを確認します。
2. 次のシリアル通信設定が使用されていることを確認します。
 - 8N1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1
 - 9600 ボー
 - ハードウェアのフローコントロール無効 (CTS/RTS)
3. Enter キーを押して、シリアルコンソールと Oracle ILOM の間の接続を確立します。Oracle ILOM へのログインプロンプトが表示されます。
4. 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (Command-Line Interface、CLI) にログインします。
Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が、Oracle ILOM に表示されます。

▼ Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン

この手順では、Oracle ILOM 管理者アカウントを持っていることと、サーバー SP の IP アドレスまたはホスト名を知っていることが必要です。

注 – サーバーの出荷時に設定されているデフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントは `root`、パスワードは `changeme` です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

1. Secure Shell (SSH) セッションを使用し、管理者アカウントのユーザー名と、サーバー SP の IP アドレスを指定して、Oracle ILOM にログインします。

たとえば、次のように表示されます。

```
ssh -l username host
```

または

```
ssh username@host
```

ここで `host` は IP アドレスまたはホスト名 (DNS を使用している場合) です。パスワードの入力を求める Oracle ILOM のプロンプトが表示されます。

2. 管理者アカウントのパスワードを入力します。

例:

```
ssh root@192.168.25.25
```

```
root@192.168.25.25's password: changeme
```

Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (`->`) が、Oracle ILOM に表示されます。

▼ ネットワーク設定の変更

サーバーの現在のネットワーク設定を変更するには、次の手順に従います。

注 – BIOS 設定ユーティリティーを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。手順については、『Sun Fire X4470 M2 Service Manual』を参照してください。

1. [34 ページの「シリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#) または [35 ページの「Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#) の方法を使用して、Oracle ILOM にログインします。

注 - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、ネットワーク設定を変更すると、接続が切断されるので、この新しい設定を使用してログインし直す必要があります。

2. ネットワーク環境に適合するネットワーク構成手順を実行し、ネットワーク設定をテストします。

- IPv4 ネットワーク設定を確認または構成するには、[手順 3 - 手順 4](#) を実行します。
- IPv6 ネットワーク設定を確認または構成するには、[手順 5 - 手順 8](#) を実行します。
- IPv4 または IPv6 ネットワーク設定をテストするには、[40 ページの「IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」](#) を参照します。

3. IPv4 ネットワーク構成の場合、`cd` コマンドを使用して `/network` ディレクトリに移動します。

```
-> cd /SP/network
```

4. 次のいずれかの手順を実行します。

- ネットワーク上に DHCP サーバーがある場合、次のコマンドを入力し、DHCP サーバーがサーバーに割り当てた設定を表示します。
- DHCP サーバーがない場合、または設定を割り当てる場合、`set` コマンドを使用し、次の表にあるプロパティの値を割り当てます。たとえば、次のように表示されます。

```
-> set /SP/network/ pendingipdiscovery=static
-> set /SP/network/ pendingipaddress=10.8.183.106
-> set /SP/network/ pendingipnetmask=255.255.255.0
-> set /SP/network/ pendingipgateway=10.8.183.254
-> set /SP/network/ commitpending=true
```

プロパティ	プロパティの設定値	説明
state	set state=enabled	ネットワークの状態はデフォルトで enabled に設定されています。
pendingipdiscovery	set pendingipdiscovery=static	静的ネットワーク構成を有効にするには、pendingipdiscovery を static に設定します。デフォルトでは、pendingipdiscovery が dhcp に設定されています。
pendingipaddress pendingipnetmask pendingipgateway	set pendingipaddress=<ip_address> pendingipnetmask=<netmask> pendingipgateway=<gateway>	複数の静的ネットワーク設定を割り当てるには、各プロパティ値 (IP アドレス、ネットマスク、およびゲートウェイ) に対して、set コマンドに続けて pending コマンドを入力した後、割り当てる静的な値を入力します。
commitpending	set commitpending=true	set commitpending=true と入力し、変更を確定します。

注 – Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、commitpending を true に設定し、ネットワーク設定の変更を確定すると、Oracle ILOM 接続が切断されるので、この新しい設定を使用してログインし直す必要があります。

- IPv6 ネットワーク構成の場合、cd コマンドを使用して /network/ipv6 ディレクトリに移動します。

```
-> cd SP/network/ipv6
```

- show コマンドを入力して、デバイスで構成された IPv6 ネットワーク設定を表示します。

次の例は、サーバーの SP デバイス上の IPv6 プロパティを対象としたサンプル出力の値です。

```
-> show
/SP/network/ipv6
Targets:

Properties:
state = enabled
autoconfig = stateless
```

```

dhcpv6_server_duid = (none)
link_local_ipaddress = fe80::214:4fff:feca:5f7e/64
static_ipaddress = ::/128
ipgateway = fe80::211:5dff:febe:5000/128
pending_static_ipaddress = ::/128
dynamic_ipaddress_1 fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64

```

Commands:

```

cd
show

```

7. IPv6 自動設定オプションを設定するには、set コマンドを使用して、次の自動設定プロパティの値を指定します。

プロパティ	プロパティの設定値	説明
state	set state=enabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。IPv6 自動設定オプションを有効にするには、この state が enabled に設定されている必要があります。
autoconfig	set autoconfig=<value>	<p>このコマンドに続けて、autoconfig の設定値を指定します。</p> <p>オプションには、次のものがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> stateless (デフォルト設定) IPv6 ネットワークルーターから学習した IP アドレスを自動的に割り当てます。 dhcpv6_stateless DHCPv6 サーバーから学習した DNS 情報を自動的に割り当てます。 dhcpv6_stateless プロパティの値は、Oracle ILOM 3.0.14 以降で使用できます。 dhcpv6_stateful DHCPv6 サーバーから学習した IPv6 アドレスを自動的に割り当てます。 dhcpv6_stateful プロパティの値は、Oracle ILOM 3.0.14 以降で使用できます。 disable 自動設定プロパティの値をすべて無効にし、リンクローカルアドレスの読み取り専用プロパティの値を設定します。

注 – IPv6 設定オプションは、設定後に有効になります。/network ターゲットでこれらの変更を確定する必要はありません。

注 – Stateless 自動設定オプションを有効にすると、dhcpv6_stateless のオプションが有効になったとき、または dhcpv6_stateful のオプションが有効になったときに、それと同時に実行することができます。ただし、dhcpv6_stateless および dhcpv6_stateful の自動設定オプションは同時に有効にすることはできません。

8. 静的 IPv6 アドレスを設定するには、次の手順を実行します。

a. 次のプロパティタイプを指定します。

プロパティ	プロパティの設定値	説明
state	set state=enabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。静的 IP アドレスを有効にするには、この状態を enabled に設定する必要があります。
pendingipaddress	set pending_static_ipaddress =<ip6_address>/<subnet mask length in bits>	このコマンドに続けて、デバイスに割り当てる静的 IPv6 アドレスおよびネットマスクのプロパティ値を入力します。 IPv6 のアドレス例: fec0:a:8:b7:214:4fff:feca: 5f7e/64

b. 次のコマンドを入力して、保留中の IPv6 静的ネットワークパラメータを確定します。

```
-> set commitpending=true
```

注 – ネットワーク設定は、確定するまで保留されます。デバイスに新しい静的 IP アドレスを割り当てると、デバイスとのアクティブな Oracle ILOM セッションがすべて終了します。Oracle ILOM にログインし直すには、新しく割り当てられた IP アドレスを使用して、新しいセッションを作成する必要があります。

9. ネットワークテストツール (Ping および Ping6) を使用して、Oracle ILOM で IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストします。

詳細は、[40 ページの「IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」](#)を参照してください。

▼ IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト

1. CLI プロンプトで `show` コマンドを入力して、ネットワークの `test` ターゲットとプロパティを表示します。

たとえば、次の出力は、`test` ターゲットプロパティを示しています。

```
-> show
/SP/network/test
Targets:

Properties:
ping = (Cannot show property)
ping6 = (Cannot show property)

Commands:
cd
set
show
```

2. `set ping` または `set ping6` コマンドを使用して、ネットワークテストをデバイスから指定したネットワークの宛先に送信します。

プロパティ	プロパティの設定値	説明
ping	<code>set ping=<IPv4_address></code>	コマンドプロンプトで <code>set ping=</code> コマンドを入力し、続けてテストの宛先の IPv4 アドレスを入力します。 たとえば、次のように表示されます。 <code>-> set ping=10.8.183.106</code> Ping of 10.8.183.106 succeeded
ping6	<code>set ping6=<IPv6_address></code>	<code>set ping6=</code> コマンドに続けて、テストの宛先の IPv6 アドレスを入力します。 たとえば、次のように表示されます。 <code>-> set ping6=fe80::211:5dff:febe:5000</code> Ping of fe80::211:5dff:febe:5000 succeeded

▼ Oracle ILOM の終了

- Oracle ILOM セッションを終了するには、CLI プロンプトで `exit` と入力します。

サーバーへの主電源の投入

Oracle ILOM に接続できることを確認し、オペレーティングシステムをインストールまたは設定する準備ができたなら、サーバーの主電源を入れます。

▼ サーバーへの主電源の投入

1. サーバーのフロントパネルにある電源/OK LED がスタンバイ電源モードにあることを確認します。
スタンバイ電源モードでは、電源/OK LED がスタンバイ点滅パターンで点灯 (0.1 秒間オン、2.9 秒間オフ) し、SP が動作していることを示します。
2. サーバーのフロントパネルにある埋め込み式の電源ボタンを押して、サーバーの主電源を入れます。

▼ 主電源の切断

- サーバーの主電源をオフにするには、次のいずれかの方法に従います。
 - 正常な停止 – フロントパネルにある電源ボタンを押してすぐに離します。ACPI (Advanced Configuration and Power Interface) が有効なオペレーティングシステムでは、これで適切な順序でのシャットダウンが実行されます。ACPI が有効なオペレーティングシステムを実行していないサーバーの場合は、即時にスタンバイ電源モードに移行して停止します。
 - 緊急電源切断 – 主電源がオフになり、サーバーがスタンバイ電源モードに移行するまで、電源ボタンを少なくとも 4 秒間押し続けます。主電源がオフになると、前面パネルにある電源/OK LED が点滅し、サーバーがスタンバイ電源モードにあることを示します。



注意 – サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーの背面パネルにある AC 電源差し込み口から AC 電源コードを取り外します。

第5章

オペレーティングシステムのインストールまたは設定

オペレーティングシステムをインストールしたり、またはサーバーの出荷時にオペレーティングシステムがインストール済みの場合は、インストール済みのオペレーティングシステムを設定したりできます。

この章では、次の項目について説明します。

- 43 ページの「オペレーティングシステムのインストール」
- 45 ページの「インストール済みのオペレーティングシステムの設定」

オペレーティングシステムのインストール

表 5-1 は、本書の発行時点で、Sun Fire X4470 M2 サーバー上でのインストールと使用がサポートされているオペレーティングシステムと、各オペレーティングシステムのインストール手順の参照場所を示しています。

注 – Sun Fire X4470 M2 サーバー上でサポートされているオペレーティングシステムの最新リストについては、Sun Fire x86 ラックマウントサーバーの Web サイトにアクセスし、Sun Fire X4470 M2 サーバーのページを参照してください。
(<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html>)。

表 5-1 サポートされているオペレーティングシステム

オペレーティングシステム	サポートされているバージョン	関連項目
Oracle Solaris	<ul style="list-style-type: none"> • Oracle Solaris 09 10/10 以降 	<ul style="list-style-type: none"> • Oracle Solaris オペレーティングシステム用 Sun Fire X4470 M2 サーバー設置マニュアル。
Linux	<ul style="list-style-type: none"> • Oracle Unbreakable Enterprise Kernel • Oracle Linux 5.5 • Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 5.5/6.0 • SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 SP1 	<ul style="list-style-type: none"> • Oracle Hardware Installation Assistant を使用して Linux OS をインストールする場合は、『Oracle Hardware Installation Assistant 2.5 ユーザーズガイド x86 サーバー版』を参照してください。 • インストールメディアから Linux OS をインストールする場合は、『Linux オペレーティングシステム用 Sun Fire X4470 M2 サーバー設置マニュアル』を参照してください。
仮想マシンソフトウェア	<ul style="list-style-type: none"> • Oracle VM 2.2.1 	<ul style="list-style-type: none"> • Sun Fire X4470 M2 サーバー仮想マシンソフトウェアインストールガイド。
Windows	<ul style="list-style-type: none"> • Microsoft Windows Server 2008 SP2/R2、Standard Edition、64 ビット • Microsoft Windows Server 2008 SP2/R2、Enterprise Edition、64 ビット • Microsoft Windows Server 2008 SP2/R2、Datacenter Edition、64 ビット 	<ul style="list-style-type: none"> • Oracle Hardware Installation Assistant を使用して Windows OS をインストールする場合は、『Oracle Hardware Installation Assistant 2.5 ユーザーズガイド x86 サーバー版』を参照してください。 • インストールメディアから Windows OS をインストールする場合は、『Windows オペレーティングシステム用 Sun Fire X4470 M2 サーバー設置マニュアル』を参照してください。

インストール済みのオペレーティングシステムの設定

サーバーの出荷時にオペレーティングシステムがインストール済みの場合は、サーバー上で使用する前に、このオペレーティングシステムを設定する必要があります。[表 5-2](#) は、本書の発行時点で、Sun Fire X4470 M2 で使用できるインストール済みのオペレーティングシステムと、インストール済みのオペレーティングシステムの設定手順の参照場所を示しています。

注 – Sun Fire X4470 M2 サーバー上で使用できるインストール済みのオペレーティングシステムの最新リストについては、Sun Fire x86 ラックマウントサーバーの Web サイトにアクセスし、Sun Fire X4470 M2 サーバーのページを参照してください。
(<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html>)

表 5-2 Sun Fire X4470 M2 サーバーで使用できるインストール済みのオペレーティングシステム

オペレーティングシステム	サポートされているバージョン	設定情報の参照場所
Oracle Solaris	Oracle Solaris 09 10/10 以降	本書の 第 6 章

第6章

インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムの設定

この章では、注文によりサーバーにインストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステム (Operating System、OS) を設定する手順について説明します。インストール済みの Solaris のバージョンは、Solaris 10 09/10 以降です。

注 – SPARC システムとは異なり、サーバーの電源を入れてもインストール済みの Solaris 10 イメージはモニターに出力されません。BIOS 電源投入時自己診断 (Power-On Self-Test、POST) とその他のブート情報が出力されます。

この章では、次の項目について説明します。

- [48 ページの「設定ワークシート」](#)
- [51 ページの「サーバー RAID ドライブの設定」](#)
- [51 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムの設定」](#)
- [53 ページの「Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムのユーザー情報」](#)
- [54 ページの「Oracle Solaris インストールプログラムの使用」](#)
- [54 ページの「Oracle Solaris オペレーティングシステムの再インストール」](#)

設定ワークシート

オペレーティングシステムを設定する前に、表 6-1 の設定ワークシートを使用して、必要な情報を収集します。使用するシステムのアプリケーションに関連する情報のみを収集してください。

表 6-1 オペレーティングシステムの設定用ワークシート

インストール用の情報	説明または例	回答: デフォルト (*)	
Language (言語)	OS で使用可能な言語のリストから選択します。	英語*	
Locale (ロケール)	使用可能なロケールのリストから地理的地域を選択します。		
Terminal (端末)	使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。		
Network connection (ネットワーク接続)	システムがネットワークに接続されているかどうか。	<ul style="list-style-type: none">• ネットワークに接続されている• ネットワークに接続されていない*	
DHCP	システムで動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用してネットワークインタフェースを設定できるかどうか。	<ul style="list-style-type: none">• あり• いいえ*	
DHCP を使用しない場合には、ネットワークアドレスを記入します:	IP address (IP アドレス)	DHCP を使用しない場合は、システムの IP アドレスを入力します。 例: 192.168.100.1	
	Subnet (サブネット)	DHCP を使用しない場合、システムはサブネットの一部かどうか。 そうである場合、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 255.255.0.0	255.255.0.0*
	IPv6	このマシンで IPv6 を有効にするかどうか。	<ul style="list-style-type: none">• あり• いいえ*
Host name (ホスト名)	システムのホスト名を選択します。		
Kerberos	このマシンで Kerberos セキュリティーを有効にするかどうか。 「はい」の場合、以下の情報を収集します。 デフォルトレルム: 管理サーバー: 最初の KDC: (オプション) 追加の KDC:	<ul style="list-style-type: none">• あり• いいえ*	

表 6-1 オペレーティングシステムの設定用ワークシート (続き)

インストール用の情報	説明または例	回答: デフォルト (*)	
Name service (ネームサービス)	Name service (ネームサービス)	該当する場合、このシステムでどのネームサービスを使用するかを入力します。	<ul style="list-style-type: none"> • NIS+ • NIS • DNS • LDAP • なし*
Domain name (ドメイン名)	システムが所属するドメインの名前を入力します。		
NIS+ および NIS	NIS+ または NIS を選択した場合、ネームサービスを指定するか、インストールプログラムに自動検出させますか。	<ul style="list-style-type: none"> • 指定する • 自動的に指定* 	
DNS	<p>DNS を選択した場合、DNS サーバーの IP アドレスを入力します。少なくとも 1 つ以上の IP アドレスを入力する必要があります。最大で 3 つのアドレスを入力できます。</p> <p>また、DNS クエリーを行う際に検索するドメインのリストを入力することもできます。</p> <p>検索ドメイン: 検索ドメイン: 検索ドメイン:</p>		
LDAP	<p>LDAP を選択した場合、LDAP プロファイルに関する次の情報を入力します。</p> <p>プロファイル名: プロファイルサーバー:</p> <p>LDAP プロファイルにプロキシ認証レベルを指定する場合、次の情報を収集します。</p> <p>プロキシバインド識別名: プロキシバインドパスワード:</p>		

表 6-1 オペレーティングシステムの設定用ワークシート (続き)

インストール用の情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
Default route (デフォルトルート)	<p>デフォルトルート IP アドレスを指定するか、OS インストールプログラムに自動検出させますか。デフォルトルートは、2 つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジを提供します。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する一意の数字です。以下の中から選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IP アドレスを指定することができます。指定された IP アドレスを使用して、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムを再起動すると、指定された IP アドレスがデフォルトルートになります。 • OS インストールプログラムに IP アドレスを自動検出させることができます。ただし、その場合は、システムがルーターのあるサブネット上にあり、そのルーターがルーターディスカバリ用のインターネット制御メッセージプロトコル (Internet Control Message Protocol, ICMP) を使用して自身を通知していることが必要です。コマンド行インタフェースを使用する場合、システムの起動時にソフトウェアが IP アドレスを検出します。 • この時点でルーターを使用していないか、ソフトウェアによって IP アドレスを検出しない場合には、「なし」を選択することもできます。再起動時にソフトウェアは、自動的に IP アドレスを検出しようとします。 	<ul style="list-style-type: none"> • 指定する • 検出する • なし*
Time zone (時間帯)	デフォルトの時間帯を指定する方法を指定します。	<ul style="list-style-type: none"> • 地理的地域* • GM からの時差 • 時間帯ファイル
Root password (ルートパスワード)	システムのルートパスワードを選択します。	

サーバー RAID ドライブの設定

サーバー RAID ドライブの設定は、インストール済みのバージョンの Solaris 10 OS でサポートされている機能ではありません。インストール済みの OS は、RAID への移行中に消去されるからです。サーバードライブを RAID で設定する場合は、RAID の設定および Solaris 10 OS のインストール手順について、次のマニュアルを参照してください。

- 『LSI MegaRAID SAS ソフトウェアユーザーズガイド』、次の Web サイトで入手可能: (<http://www.lsi.com/support/sun>)
- 『Linux オペレーティングシステム用 Sun Fire X4470 M2 サーバー設置マニュアル』、次の Web サイトで入手可能: (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=E20781-01&id=homepage>)

インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムの設定

設定ワークシートを完成したら、次の手順に従って、インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムを設定します。

▼ Oracle Solaris 10 OS の設定

1. Oracle ILOM にログインしていない場合、ローカルでシリアル接続からログインするか、またはリモートで Ethernet 接続からログインします。
[34 ページの「シリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#) または [35 ページの「Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#) を参照してください。
2. サーバーの主電源が入っていない場合、主電源を入れます。
[41 ページの「サーバーへの主電源の投入」](#) を参照してください。

3. Oracle ILOM プロンプトで、次のコマンドを入力し、プロンプトに答えます。

```
-> start /SP/console
```

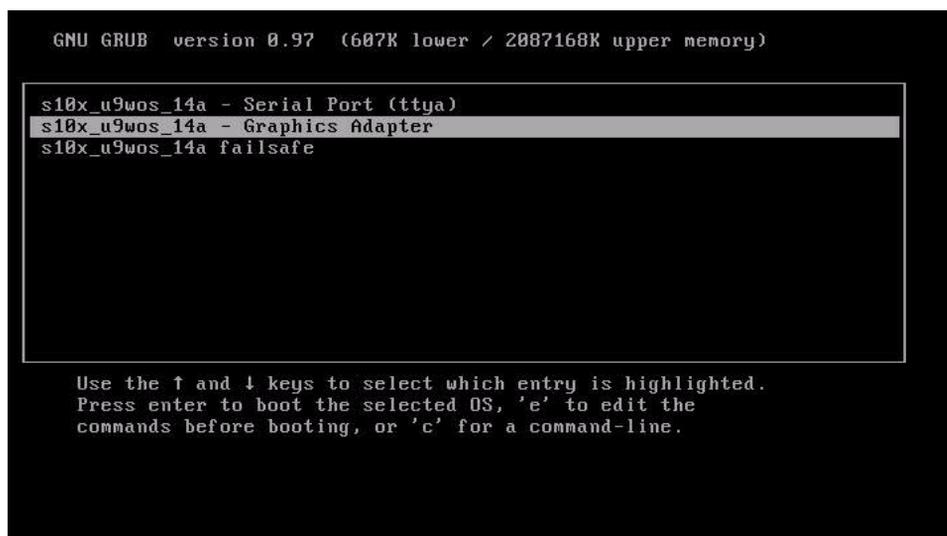
```
Are you sure you want to start /SP/console (y/n)? y
```

```
Serial console started.
```

「GRUB」メニューが表示されます。

「GRUB」メニュー (図 6-1) で、シリアルポートへの出力を表示するか、またはビデオポートに接続されたデバイスへの出力を表示するかを選択できます。

図 6-1 インストール済みの Solaris の「GRUB」メニュー画面



4. 上下の矢印キーを使用して、表示オプションを選択します。

- シリアルポートへの出力を表示するには、次のオプションを選択します。

```
s10x_u9wos_14a - Serial Port (tty)
```

- ビデオポートへの出力を表示するには、次のオプションを選択します。

```
s10_u9wos_14a X - グラフィックスアダプタ
```

ビデオポートへの出力を表示することを選択した場合、デバイスをサーバーの VGA コネクタに接続し、このデバイスで設定を完了する必要があります。デバイスとサーバーの接続についての詳細は、[第 3 章](#)を参照してください。

注 – デフォルトでは、システムはシリアルポートへの出力を表示します。「GRUB」メニューでオプションを選択しないと、10 秒後に「GRUB」メニューが使用できなくなり、システムはシリアルポートへの出力を表示します。

5. Oracle Solaris 10 の画面に表示されるプロンプトに従い、ソフトウェアを設定します。

システムとネットワークの情報を指定するときは、48 ページの「設定ワークシート」で調べた情報を入力してください。

サーバーへのネットワーク情報の割り当てに選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって、表示される画面が異なります。

システム設定情報の入力後、サーバーが起動プロセスを完了して、Solaris ログインプロンプトが表示されます。

Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムのユーザー情報

この節には、Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムに関する情報の参照先を示します。

Oracle Solaris 10 のユーザーマニュアル

Oracle Solaris 10 OS のマニュアルは、Oracle ドキュメントの Web サイトで入手できます。<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/solaris/documentation/index-jsp-135724.html>

Solaris 10 09/10 Release and Installation Collection までページをスクロールダウンし、Solaris 10 09/10 マニュアルセットのドキュメントリストを表示してください。指定されている場合は、x86 システム固有の説明手順に従ってください。

- Oracle Solaris 10 のインストール手順については、『Solaris 10 09/10 インストールガイド(インストールとアップグレードの計画)』、『Solaris 10 09/10 インストールガイド(基本編)』、および『Solaris 10 09/10 インストールガイド (ネットワークインストール)』を参照してください。
- システムのアップグレードについては、『Solaris 10 09/10 インストールガイド (Solaris Live Upgrade とアップグレードの計画)』を参照してください。
- トラブルシューティング情報については、『Solaris 10 09/10 インストールガイド (カスタム JumpStart/上級編)』の「付録 A」を参照してください。
- パッチおよびその他の最新情報については、Sun Fire X4470 M2 サーバーご使用にあたってを参照してください。パッチおよび手順については、Web サイト (<http://support.oracle.com>)。

Oracle Solaris 10 のマニュアルは、Oracle Solaris OS ソフトウェアに同梱の Oracle Solaris Documentation DVD にも収録されています。

Oracle Solaris インストールプログラムの使用

Oracle Solaris 10 OS DVD に収録されている Oracle Solaris インストールプログラムは、グラフィカルユーザーインターフェイス (Graphical User Interface、GUI) を使用して、またはリモートコンソールで対話式テキストインストーラとして実行できます。Solaris Device Configuration Assistant は、Oracle Solaris インストールプログラムに含まれています。

SPARC ベースシステムではなく、x86 ベースシステムの手順に従ってください。詳細は、インストールしたバージョンの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムに関する Oracle Solaris 10 Release and Installation Collection を参照してください。ドキュメントは、以下の Web サイトで入手できます。

(<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/solaris/documentation/index-jsp-135724.html>)

インストール済みの Oracle Solaris OS を設定すると、Solaris インストールプログラムでシステムが再起動され、ログイン画面が表示されます。

Oracle Solaris オペレーティングシステムの再インストール

Oracle Solaris OS を再インストール、または別バージョンの Oracle Solaris OS をインストールする場合は、『Solaris 10 インストールガイド (基本編)』を参照してください。

Oracle Solaris オペレーティングシステムのダウンロード

Oracle Solaris OS のソフトウェアは、次の Web サイトからダウンロードできます。

- Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムをダウンロードするには、次の Web サイトにアクセスしてください。

(<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/solaris/downloads/index.html>)

- Oracle Solaris パッチをダウンロードするには、次の Web サイトにアクセスしてください。

(<http://support.oracle.com>)

索引

A

AC OK LED
場所, 5

C

CPU
説明, 6

E

Ethernet ケーブル
接続, 30

Ethernet 接続
Oracle ILOM へのログイン, 35

O

Oracle ILOM SP
初回セットアップと設定, 33
接続先, 33
デフォルトのユーザー名とパスワード, 34, 35

Oracle Solaris 10 OS。オペレーティングシステムを
参照してください、Oracle Solaris OS

Oracle Solaris OS インストール済みソフトウェア、
設定ワークシート, 48

Oracle Solaris OS インストール済みソフトウェア, 47

P

PCIe カード
概要, 7

S

SER MGT/RJ-45 ポート
場所, 30

SP NET MGT Ethernet
SP NET MGT Ethernet ポート, 30

い

インストール済み
Oracle Solaris、設定, 47

お

オプション
サーバー部品, 3

オペレーティングシステム
Oracle Solaris OS
インストール済みソフトウェアの設定, 47
再インストール, 54
ダウンロード, 54
ユーザーマニュアルの場所, 53

か

外部ケーブル
接続, 30

環境要件, 9

き

ギガビット Ethernet (LAN) コネクタ, 30

け

- ケーブル管理アーム (CMA)
 - インストール, 23
 - 動作の確認, 27
- ケーブルフックとループストラップ
 - インストール, 26

こ

- 工具と器機
 - サーバーの設置に必要, 1
- 固定部品
 - インストール, 15

さ

- サーバー
 - 電源シャットダウン手順, 41
- サーバーの開梱, 3
- サーバーの主電源
 - オフにする, 41
- サーバーのラック内への取り付け, 12
- サービスプロセッサ
 - 説明, 7

し

- システム状態 LED
 - 場所, 5
- シャーシ
 - 位置決め用ピン, 16
- 仕様
 - 環境, 9
 - 電気, 8
 - 物理, 8
- シリアル接続
 - Oracle ILOM へのログイン, 34
- シリアルヌルモデムケーブル
 - 接続, 30

す

- スライドレール
 - 動作の確認, 27
- スライドレール構成部品, 14, 17
- スライドレールの取り付け
 - ボルト止めスライドレール構成部品, 14

せ

- 静電気防止アースストラップ, 3
- 静電放電 (ESD), 3
- 設置作業のチェックリスト, 2

ち

- 注意事項, 3

て

- ディスクドライブ
 - 概要, 6
- 電気仕様, 8
- 電源 OK LED
 - 場所, 5
- 電源ケーブル
 - 接続, 30
- 電源故障 LED
 - 場所, 5
- 電源ボタン
 - 場所, 31
- 電子部品
 - 静電気による損傷からの保護, 3
- 転倒防止用バー, 19
- 電力消費数
 - 意味, 8

は

- 背面パネル
 - コンポーネント
 - X4470 M2 サーバー, 5
- 背面パネルのポートとコネクタ
 - 場所
 - X4470 M2 サーバー, 5, 30
- 発送箱
 - 内容, 3

ふ

- ファンモジュール保守要求 LED
 - 場所, 4
- 物理仕様, 8
- フロントパネル
 - 機能と部品
 - X4470 M2 サーバー, 4
 - コントロール
 - 場所, 31

ほ

- ポート, 30
 - SER MGT/RJ-45, 30

め

- メモリー
 - 機能の概要, 6

ら

- ラックの互換性
 - 確認, 12
- ラックへの取り付け, 12
- ラックマウント
 - CMA スライドレールコネクタ, 24
 - ケーブルの取り付け, 25
 - ケーブルフックとループストラップ
 - インストール, 26
 - スライドレールストップ
 - 解放, 27
 - 転倒防止用バー, 19
 - 取り付けピン (mounting pin), 17
 - ネジ穴, 17

り

- リスト
 - パッケージ内容, 3

れ

- レール構成部品
 - ラックマウント, 11

ろ

- ロケータ LED、位置, 4

